

視点1

行事を楽しみ、伝えていく

私はある保育雑誌で一年間、季節の行事の由来を連載したことがあります。調べていくうちに、先人たちの価値観や美意識、遊び心を知って、興味が湧き、のめり込んでいきました。そして、多くの方にとってほしいと思うようになり、『子どもと楽しむ行事とあそびのえほん』を書きました。

昔から伝えられている行事は、今も暮らしの中に生き続けています。私の母は、ひな祭りによく、雛^{ひな}司^{ずし}を作ってくれました。今は私が作っています。家族十名分。お内裏様はペアなので二十人の雛^{ひな}司^{ずし}がずらりと並びま

す。わが家のひな祭りの景色が孫世代へと伝わっていくといいなと思います。私たち自身が伝承者なんですね。

今回は、季節の行事の中から三つを選んで、

お話ししたいと思います。小さな人たちと、園や家庭で祝っていただけならうれしいです。



▲雛^{ひな}司^{ずし}。四歳の孫娘との共作

すとうあさえ

(幼年童話作家)

すとうあさえ

『子どもと楽しむ 行事とあそびのえほん』（のら書店）で産経児童出版文化賞、『はしれ ティーセルきかんしゃデーデ』（童心社）で住田物流奨励賞を受賞。聖セシリア女子短期大学非常勤講師。

端午の節句の「柏かしわ」と「菖蒲しょうぶ」

五月五日は、端午の節句です。男子の成長を願う行事で、こいのぼりをあげたり、五月人形を飾ったりします。行事食は柏餅、ちまき。菖蒲湯に入り、菖蒲を頭に巻くと賢くなれるといわれています。ここまではよく知られていることで、園でもこいのぼりを制作したり、かぶとを折ったりすると思います。

では、なぜ柏餅を食べたり、菖蒲湯に入ったりするのでしょうか。

柏の葉は、冬になると枯れますが、新芽が出るまで落ちません。私も実際に見たことがあります。こんなに枯れているのに何で落ちないのだろうと不思議に思いました。その様子に「子孫繁栄」子の成長を見守る親の気持ち」を重ねて、端午の節句に柏の葉でくるんだお餅を食べるのだそうです。昔の人は、身近な木や花や草などをよく観察していて、

その特徴を行事に織り込んでいます。素晴らしいセンス。それだけ自然と向き合って暮らしていたということだと思います。ちなみに、秋になると柏は赤い帽子のかわいい実をつけます。もし近くに柏があつたら、一年を通して観察してみてください。

端午の節句には、菖蒲やヨモギで厄払いをします。民話「くわすにようぼう」では、菖蒲とヨモギが鬼ばばを退治してくれます。どちらにもおいが強いので、穢けがれをはらう力があるとされています。ただ、間違いやすいのが菖蒲。主役は、アヤメ科の花菖蒲ではなく、気の毒なくらい地味な花をつけるサトイモ科の菖蒲です。五月は暑くなり始めて、悪い虫や病気がはやりやすくなる頃。昔の人たちは、植物の力で病や穢けがれをはらおうとしたのです。子どもたちに、菖蒲やヨモギのにおいを嗅かせてあげてください。五感の鋭い子どもたち。穢けがれをはらうにおいをキャッチするかも。

七夕の「かざり物」

七夕は、七月七日。織姫と彦星が天の川を渡って一年で一日だけ会えるというロマンチックな星伝説や、笹飾り、行事食のそうめん。これは、よく知られていることです。では、織姫と彦星はどうやって天の川を渡るのでしょうか。ある集まりで七夕の話をした時に、参加者に聞いてみました。すると、「泳いで渡る」「石の橋を作る」「船で渡る」などいろんな答えが出ました。意外に知らないのが驚きました。正解は「かざさぎの橋」です。かざさぎという鳥が羽と羽を合わせて橋を作ります。かざさぎはカラスの仲間で、「カチカチ」と鳴くので勝ち鳥といわれ、縁起の良い鳥とされています。佐賀県の鳥です。中国の鳥だと思っていたので、佐賀の鳥だと知った時は、ぐんと星伝説が身近に思えてうれしかったのです。かざさぎという鳥を、ぜひ子どもたちに

教えてあげてください。

また、笹飾りには一

つ一つ意味があります。

よく作る「輪つなぎ」

は、「どんどん長くつな

げて天に願い事を届ける

」という意味がある

そうです。また、短冊

に願い事を書くように

なったのは、江戸時代の寺子屋が始まりで、

昔は「梶」の葉の裏に書いていました。寺子

屋に倣って四角い紙でなくても、好きな形の

紙に願い事を書いてもいいのです。行事の形

は時代とともに変化しています。私たちも、

自由な発想で楽しみたいものです。

節分の「鬼はらいのおまじない」

立春の前日の節分には、「豆まきをして鬼を追ひ払います。旧暦で暮らしていた時、一月



▲願いは一つ。十五歳の愛犬の健康

一日は、立春に一番近い新月の日でした。現在も中国などでは旧正月になると盛大にお祝いをします。立春は、新しい年の始まりを決める大事な目安の日。そこで新年を迎えるにあたり、邪気や穢れ（鬼）をはらいます。そしてもう一つ。私たちの心の中に住んでいる鬼（意地悪鬼、嘘つき鬼、怒り鬼などなど）を追い払い、きれいな心で新年を迎えるという意味もあるように思います。

昔から、節分には「焼^やいかがし」というおまじないがあります。ヒイラギの枝に焼いたイワシの頭を刺して、玄閼や軒下に挿します。鬼はヒイラギのトゲで目を刺されるのを恐れ、イワシの臭いを嫌うので近寄ってこないそうです。最近では、節分が近づいてくると、お店で売られるようになりました。わが家では毎年作って玄閼に挿しておきます。昔の人の、行事に自然の力を取り込む知恵には本当に感心してしまいます。ヒイラギのトゲ、ほんと

に痛いです。子どもたちに触らせてあげてください。

行事を伝承する

行事の両輪は、

「祈り」と「感謝」

だと思っています。「豊作」「健康」「幸せ」を神に祈り、感謝します。昔は病気になっても良い薬や優秀な医者に頼れるわけではなく、自然災害に見舞われても抵抗するすべがありません。ただ神様に祈り、願うだけです。自然を人がコントロールするのではなく、自然と共に生きていくという価値観がそこにあります。

日本は四季の移ろいの美しい国です。家庭や園で、小さな頃から行事に親しむことで、私たちの先祖が育んできた感謝や祈り、自然への畏敬の念が、未来へと伝承されていったらいいと思います。



▲わが家はヒイラギモクセイの焼^やいかがし